



Title	巻頭言
Author(s)	橋本, 聡
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 63, 1-3
Issue Date	2012-11-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/51173
Type	bulletin (other)
File Information	MSC63_001.pdf



[Instructions for use](#)

〈特集〉 言語の多様性と言語管理理論

巻 頭 言

橋 本 聡

本特集は、昨年2011年に当研究院が招聘した3名の社会言語学者による寄稿で構成されている。いずれもチェコ共和国カレル大学（プラハ）哲学部の専任教員で、リーダー格のイジー・ネクヴァピル Jiří Nekvapil 氏は一般言語学、若手のヴィート・ドヴァリル Vít Dovalil 氏はドイツ語学、同じくマリアーン・スロボダ Marián Sloboda 氏はスラヴ語学の担当とそれぞれ所属学科は異なるものの、古典期の構造主義を担ったプラハ学派がそうであったように、カレル大学を拠点に研究チームを組み、近年世界的に注目を集める言語管理理論 Language Management Theory の開発を強力に推し進めている方々である。今回の寄稿も、理論の射程の概観（Nekvapil）、EU レベルの政治的法的言説の分析（Dovalil）、ヨーロッパ各地でのフィールドワークの成果（Sloboda）と多岐にわたるが、いずれも言語管理理論を扱った先端的論考である。

当研究院ではここ数年継続的に、言語的多様性や多言語性に関する研究イベントを開催している。2010年6月に札幌と東京の2会場で行われた国際シンポジウム「超国家的枠組、標準化、ネットワーク化：ヨーロッパ、日本、アフリカの組織的多様性マネージメント Supranational Frameworks, Standardisation, Networking: Organised Diversity Management in Europe, Japan, and Africa」（公共伝達論分野企画運営）では、広い意味での多様性管理 diversity management の枠組みの中で、社会階層や土着的部族間の関係性の調整とともに、言語的多様性の管理を中心的なテーマに据えた。ヨーロッパでは近年、言語的多様性を超国家的次元で組織的に管理する試みが進められており、上記シンポジウムでは、北イタリアの歴史的マイノリティの事例や汎欧的な移民統合の取り組みが検討された（詳細については本誌60号を参照）。

言語的多様性はまた、昨年2011年開催の2つのイベントでも中心的なテーマだった。1つは、当研究院と本学グローバル COE プログラム（スラブ研究センター）との共同企画で実現した Jiří Nekvapil 氏による特別セミナー、そしてもう1つが、部内共同研究事業として行われた国際シンポジウムである。両者の詳細は以下のとおりで、*印を付したものが今回の寄稿のもととなった講演と口頭発表である。

特別セミナー (2011年3月4日開催)

RFMC & GCOE Special Seminar

* Jiří Nekvapil (Charles University Prague): From Language Planning to Language Management: J. V. Neustupný's Heritage

国際シンポジウム (2011年9月26日開催)

RFMC International Symposium on Multilingualism: Perspectives from Europe and Japan
Satoshi Hashimoto (RFMC): Introductory remarks

* Vít Dovalil (Charles University Prague): Equality of languages as an ideology in the European political and legal discourse

* Marián Sloboda (Charles University Prague): Bilingualization of public signage in Europe: Advocacy coalitions and language policy processes in Croatia, Czechia, Hungary and Wales

Kylie Martin (RFMC): Mapping the Ainu sociolinguistic ecologies: the relationship between language learning, pride and self-identity amongst Kantō Ainu

Nicolas Jégonday (RFMC): The Common European Framework of Reference for Languages and the foreign language learning context in Japan

上記のイベントにカレル大学からゲストを招いた理由は、当研究院がかねてから同大学と研究者ベースの交流を続けてきたことに加え、部内の多言語性研究チームの関心が、カレル大学のスタッフたちによる「言語管理理論」に向けられたからにほかならない。

言語管理理論は、1980年代における J. V. Neustupný と B. H. Jernudd の着想を出発点に発展してきた社会言語学理論で、すべての言語問題を包括的に扱う枠組みを構想している点に特徴がある。従来の言語計画、言語政策研究がもっぱらマクロの次元（例えば国家による言語政策）を扱っていたのに対し、言語管理理論では逆に、すべての言語問題の発生ないし認知がミクロの次元（例えば母語話者と非母語話者によるその都度のインターアクション）で探し出され、それ以降のプロセスが言語学的に記述されていく。その際、言語問題の解決が言語内にとどまらず言語外においても実現したのか否かを峻別する倫理性を保ちつつ、語用論等を駆使するなど、より言語学的な手続きを重視する点で、権力・非権力のイデオロギー性の告発に軸足を置く批判的言説分析等とは異なる方向性が顕著となる。ちなみに上記2010年のシンポジウムのタイトルにある「組織的管理 organised management」とは、もともと言語管理理論に由来する用語である。

言語管理理論は、その中心的提唱者 Neustupný がカレル大学出身でプラハ学派構造言語学の継承に積極的であったこと、また長くオーストラリアの教壇に立ち、社会言語学のみならず日本語教育研究の分野においても先導的研究教育者であったことから、現在はチェコ、オースト

ラリア、日本の後継世代による意欲的研究が目立っている。ヨーロッパでは、チェコ研究を経由してドイツの、また Nekvapil らがかかわる社会言語学研究汎欧州ネットワークを通じて他の国・地域の研究者にもインパクトを与えつつあり、今後は北米などでも言語計画研究者たちの間で関心が強まると考えられる。

当研究院では今後ともプラハのグループとの研究交流を継続する予定である。そのことを含め、今回本誌への寄稿を快諾された Nekvapil、Dovalil、Sloboda の3氏には心から謝意を表する次第である。